

終わらない夏の
さいごのいちにち

玉沢円



海の底で、眠る夢をみた。

§

ミンミンミンミンミンミン

まるで、生き急ぐかのような蝉時雨が聞こえた。

ギラギラと、焼き付くほどの真夏の太陽が燦めいていた。

目を細め、掌でひさしを作りながら、その眩しすぎる空を見上げる。その瞬間、こめかみかに浮き出た汗がつうつと頬を伝い、顎へと落ちていく。

「あつっーい」

思わず漏れるのはそんな声。たままないよーなんて言いながら、どこか楽しげな声。

「今年の夏は、本当に暑いねえ」

手の甲で汗を拭いながらくすくすと笑う。何が楽しいかだなんて自分でもよく分からないのに笑みがこぼれてしまう。

青い空が、流れて行く白い雲が、微かに頬をくすぐっていく生ぬるい風が、その全てが愛おしい。

「アイスたべたーい」

ざざーん ざざーん

聞こえるのは波の音。

ざざーん ざざーん

岸辺から見える岩肌に打ち寄せ砕け散る白波。

「んー、このまま飛び込んじゃおうかなあ」

ゆつたりとしたTシャツの胸元をばたばたとさせながら、少女は独りごちて……。

「馬鹿。そんなことしたら死んじゃうぞ」

「そうだよ。せめて水着に着替えなないと」

「いや、そういうことじゃなくてだな……」

「ん？ じゃあ、どういうこと？」

「もーっ！ おっそいよー、ふたりともー！ 汗だくになっちゃったよー!!」

背後から声をかけてきた二人の少女に彼女は少し不満げなだけども嬉しそうな笑顔を浮かべてそう言った。

「仕方ないじゃん。ハルがのんびりしてるんだら」

「えー、私のせいじゃないよー。ランちゃんがわんこと遊んでたからでしょー」

「遊んでたんじゃねーよ。ハルが犬に吠えられて怖がってたからじゃん」

「う……それは、そうだけ……」

ふわふわのロングヘアの少しおっとりとした女の子は、男の子みたいだな、だけど可愛らしいポニーテールの少女にそう言われて、気まずそうにもじもじとする。

「で、でもね、しおいちゃん。別に私、のんびりしてたわけじゃなくて……」

「あはは、わかっているわかってる。ハルちゃん犬、苦手だもんね?」

「子供の頃からそうだよなー。いい加減慣れるよ」

「し、しかたないでしょー」
そんな二人の様子をやっぱり楽しそうに見つめて、しおいと呼ばれた少女はくすくすと笑った。

「変わらないね、二人は」

「しおいだってそうだろう」

「まあ、そうですけれど」

「ふふ、私たち、誰も変わらない」

「少し大人になんないといけないのになー」

そう言いながらも、ランはこれっぽっちもそんなことなんて思っていない様子。

「いいんじゃないかな、これで」

「うん。私もそう思う」

しおいも、ハルもそれは同じ。

「あたしは嬉しいよ。都会にいつちゃった二人がちゃんと夏

休みに帰ってきてくれて、あの時と全然変わってなくて」

そう、それは、三人の少女に共通した、『しあわせ』の証だった。

「ここも変わらないね」

「うん、全然変わらないよ。田舎のまーんま」

「ほーんと、ド田舎だよなあ。今時コンビニもないなんて」

「コンビニどころかスーパーも、ファミレスだって車じゃないと行けないからね」

「でも、私、この街好きだなあ」

「別にわたしだってきらいだなんて言っていないだろー」

「ふふ、わかっているわかってる。きらいだったら帰ってこないよね?」

「まあ、な」

「ふふ」

「なんだよ?」

「ランちゃんがこの街に帰って来るのは、しおいちゃんがいるからだよね?」

「な……っ、そ、そうだよ! 悪いか!」

「あはは、ツンデレだよ」

「誰がツンデレだよ、このーっ!」

「きゃー! ランちゃんが怒ったー!」

「逃げろーっ!」

じりじりと焼き付くような日差しの下でも、少女達は元気

になりながら、けらけら笑ってじゃれあうスキンシップ。

「やーっ！」

「あっ！ 逃げた！ しおい！ おっかけろっ！」

「了解！ ラン隊長！」

「もーっ！ 二人ともやめてよーっ！」

どこまでもどこまでも笑いが絶えない。追いかけて回されるハルまでもが、楽しくてたまらないとばかりに笑っている。

そんな三人を、かんかん照りの太陽はただ優しく見守っていて――

それを後押しするかのように、ミンミンゼミは大合唱を続けていた。

§

「はー、はー、疲れた……」

「汗だくになっちゃったね」

「しおいちゃんのせいでしょー」

「あたしだけのせいじゃないもん」

ぜえはあと肩で息をしながら木陰にしゃがみ込むハルの背中を優しく撫でて、しおいは悪びれた様子もなく、くすくすと笑った。

「で？ 今日は何して遊ぶんだ？」

そんな二人にやっぱ汗だくになりながら、それをあんまり気にした様子もなく、ランは問いかける。

「海で泳ごう！」

「またかよっ！」

まるで漫才コンビのような絶妙なツツコミ。

「えー、ダメー？」

だけど、しおいにはポケたつもりなんかまるでなくて、それはもう、最初から最後まで素の、ただの本音。

「しおいちゃんは本当に海、好きだよね？」

「だって、暑いし。それにこんなに綺麗な海だし。二人は海、きらい？」

「そんなことはないけど……」

「いや、ぶっちゃけ海ばっかじゃ飽きるだろ？ なんか他のことしようぜ、他のこと」

「他の事って？」

「んー……お買い物とか？」

「ナシだな」

「なしだねー」

「えー、なんでーっ！」

やっぱり息びつたり、今度はビシッとハルにツツコミ。

「何でも何も……」

「ここ、ジヨスコもないしねー」

田舎の年頃の少女たちの遊ぶ場所といえばジョスコ、なんて巷ではいわれるわけだけど、そもそも存在しない場所には行けない。

「んー、そっかあ」

「それじゃあ、おばーちゃんのお店行く?」

「えっ!? あの店まだ潰れてなかったのか!」

「潰れてないよ。おばーちゃんに怒られちゃうよ?」

「だってあのばーちゃん幾つさ……」

「十年くらい前から全然変わってないよね……」

「あはは、そういえばそうかも」

代わりにこの街には、一軒の駄菓子屋というか、小さな何でも屋の様な店があった。年老いた、けどどやけに元気なお婆さんが経営する、街の少女たちの数少ない面白い物スポーツだった。

「かき氷食べよう、かき氷」

「かき氷か、いいな」

「うん、私もかき氷食べたい!」

真夏のうだるような暑さの中で食べるかき氷の美味しさを少女たちは知っている。思わず一気にかき込んでしまつてきいんって頭が痛くなつてしまうのも、これまたオツなもの。「そういえば昔しおいさ、調子のとってかき氷三杯食べてお腹壊したことあつたよな」

「もー、それ何年前の話ー!」

「あは、私もそれ、覚えてる! 大変だったよな、あの時。その後風邪も引いて三日くらい寝込んでしまったもんね」

「ハルちゃんも忘れてよー!」

「バカは風邪引かないって言うけど、バカだから引く風邪もあるんだあつて、わたしあの時知ったんだよな」

「そういうことランちゃんに言われたくありません!」

「ずっとずっと昔の、やらかしてしまった失敗だって、三人の間では楽しい思い出。全て笑い話で、怒りながらも思わず頬が緩んでしまう記憶。」

「ま、いいや。それよりいいこうぜ。あそこなら、ここよりは涼しいし」

「今にも煙噴きそうな扇風機がガタガタ回ってたよな」

「あれ、今でも現役だよ?」

「えっ!? マジ!」

「マジマジ」

「ふふ、お婆ちゃんに会うの久しぶりだなあ。楽しみなあ」

「わたしはどうせ説教されるから、気が重いけどな」

待ち合わせ場所の岸辺から、お婆ちゃんのお店まではほぼ一本道。そこに続く道は両側に田んぼが連なる舗装もされていない農道。土と、湿気と、草と、堆肥のにおいがする、いかにも田舎の田園風景。

「ほんと、変わんないなあ、ここ」

「なんだか嬉しくなっちゃうね」

「そう？」

「しおいちゃんはそう思わない？」

「うーん。どうだろう」

ずっとここに住んでいるしおいにはいまいちピンとこないけれど、きつと、都会に出て行った二人には思うことがあるのだろう。

「むかしさあ、ザリガニ釣りしたよな」

「そう！ 私怖いつて言ってるのに、ランちゃんほれほれつて目の前に突き出してきて。ひどいよ」

「そんなことしたっけ？」

「いじめっこは自分の悪行を忘れちゃうってほんとだね」

「人聞きの悪いこと言うなよー」

「悪くない！ 事実！」

「記憶にございませーん」

それは少し寂しいことのような気もするけれど、反面、とても嬉しいことのようにも思えて……。

「ふふ……」

「しおいちゃん？ どうしたの？」

「暑さでおかしくなった？」

「違うよ、もう」

目を細め、空を見上げる。

「ただ、なんていうのかな……」

眩しい日差しをあえて見つめる。

「だったらずつと。ずっと、このままだったらいいなって」
なんだかしみりと、そんなことを考えてしまうのだった。

S

「んー、やっぱりきいんつてくるーっ」

「もー、ランちゃん一気に食べ過ぎ」

「あっ！ あたしもキタっ！ キタキタっっ！」

「えっ！？ しおいちゃんもっ!？」

一体築何十年なのか、古びた、台風でも来たら吹き飛んでいってしまいそうなお店の中で、きゃいきゃい、きゃあきゃあど騒ぎながら、三人は色とりどりのかき水を口に運ぶ。

しおいは赤と白のイチゴ練乳、ランは黄色いレモン味。ハルは緑宇治抹茶に白玉を乗せて、思い思いの好みの味を楽しむ。

「まったく、大きくなっても落ち着かない子たちだね」

それを年齢不詳の店主のお婆さんが、やれやれと呆れたような声で肩を竦めて呆れていた。

「へーん、わたしたちは若いからねー。ばーちゃんとは違うんですー」

「オトメだからねー、あたしたち」

「はんつ。オトメがそんな姦^{やか}しい声をあげるもんかい」

本当に、このお婆さんは三人が小さな子供の頃からまるで変わらない。ずっとずっと昔から、今と同じ『お婆さん』だった様に思う。

「ごめんなさい、お婆さん。私たち、久しぶりだから楽しくって」

「いいんだよ。ガキはガキらしくきやあきやあさわいでりやいいんだ。オトメだなんてナマイキな事を言わなきゃね」

そして今もあの時も、お婆さんはいつでも不機嫌そうだったけれど、実際にはそうでもないんだってことを三人はよく知っていた。

「ばーちゃんとかのかき氷、上手いんだよなー」

「うん。私もそう思う。学校の近くのお店、こんなに美味しくないもん」

「ふーん、そうなんだ」

「氷が違うのかなあ」

「田舎の方が水、美味しいっていうもんね」

「言っとくけどそれ、水道水を冷凍庫で凍らただけだよ」

「うわっ！ 衝撃の事実！」

「おばーちゃん、そういうのいいっこなしだよー」

「あ、でもでも、もしかしたらシロップが違うとか？」

「それも市販のヤツ。どこでも買えるよ。むしろ都会の方が美味しいのが出回ってるんじゃないかね」

「おばーちゃん！」

なんだか懐かしい。子供の頃に帰ったような感じ。

いつでもこのおばーちゃんは身も蓋もないことを言っていて、不機嫌そうで一言多くて、だけどどこか優しくして……。

「あんたたち、知ってるかい？ かき氷のシロップってね、色が違うだけでどれも同じ味なんだ。人間の脳ってのはバカだから、誤魔化されて違う味だと思っちゃまうのさ」

「あ！ やめてやめて！ 聞きたくない！」

「この意地悪ババア！ かわんないなアンタ！」

「ランちゃん、失礼だよー」

憎めない。

違う。

大好き。

そう、三人はこの年齢不詳で口の悪い、ちよつと意地悪なおばーちゃんのことを大好きだった。

相手が自分たちのことをどう思っているのかはわからないけれど、きっと憎からず思ってくれているのだろうと信じていた。

「この年になつたら五年や十年で変わるもんかい」

憎まれ口も、どこか優しい。

「それよりあんたたちが変わっていないのが大問題だね。早く大人になんな」

いつだって睨んでいるような細い目も、なんだか暖かい。

「だって、おばーちゃんから見ればあたしたちなんて、いつまでたっても子供でしょう？」

「ふん、当たり前だろ。何言ってるんだい、馬鹿な子だね」

聞こえてくるのは真夏の音。やかましくて堪らないミンミンゼミの。微かに聞こえる波の音。

そして、羽根が歪んでいるのだろう。ザーっとカタカタ音を立てている古びた扇風機。

「ばーちゃんの店もさ、クーラーくらい入れなよ。お客様サービスがなっていないと思うよ？」

「ナマいってんじゃないよ、クソガキが。子供にクーラーなんて贅沢さ」

「お婆さんは暑くないんですか？」

「これくらいでへばるほどヤワじゃあないよ」

「その割には汗だくだけど……」

「汗かくくらいの方が健康でいられるんだよ」

「まだ健康でいるつもりだったんだ……」

「聞こえてるよ、クソガキ」

「あ、ヤバ……」

あの日も、こんな会話をしていたような気がする。

あの時も、こんな風に低い声ですごまれたような気がする。

「大体あんたたち、宿題はやったのかい？」

「あー、えっと……まだ、あんまり……」

「一応、少しずつは進めてるんですけど……」

「あとになってひーひー言っても知らないからね」

「はあい」

そう、あの日もこんな感じで『宿題やんな』って叱られて……。

「何言ってるんだよばあちゃん」

そう、こんな感じでランは言い返したんだ。

「夏休みはまだ始まったばかりかだぜー」

余裕綽々でそういったんだ。

「なあ、しおい」

あの日も、あの夏も、しおいに語りかけて――

「しおい？」

「しおいちゃん？ どうしたの？」

「え……っ？」

一瞬、音が途絶えた気がした。

世界から色彩が失われたような気がした。

そして、その静寂の中でしおいは――

「なにぼーっとしてんだよ」

「まだ頭痛い？」

「あ、ええっと……」

刹那、戻ってくる音。色。感覚。

「大丈夫？」

「また腹壊したのかあ？」

「あはは、違うよー」

店の外に視線を移すと、じりじりと灼けるような日差しが地面を照らしていた。ゆらゆらと、陽炎のように世界が揺らめいていた。

「ちょっと、ぼんやりしちゃっただけ」

そして、笑う。

苦笑い。

それから、心配して貰ったのが嬉しくてはにかみ笑い。

「気持ち悪いやつー」

「ちょっと！ それはひどくないっ!？」

けらけらと笑った。

「何考えてたんだよこのむっつりー」

くすくすと笑った。

「そういうこと考えるランちゃんがむっつりだと思っ」

「あはは、ほんとだ」

「あつ！ ハルっ！ お前しおいの味方するのかこの裏切り者ーっ！」

「私は元からランちゃんの敵ですー」

「ああ、ほんと喧しいガキどもだね」

そんな風に憎まれ口を叩くおばーちゃんまで、なんだか楽

しそうで……。

ああ、夏っていいなあなんて。しおいはぼんやりとそんなことを考えた。

§

カナカナカナカナカナ

ヒグラシの声が聞こえた。

カナカナカナカナカナ

切なげに、もの悲しげに、彼らはその歌を奏でていた。

一日の終わり。

楽しかったこの日が終わってしまうというセンチメンタリズム。

「ゆーやーけーこーやーけーで、ひーがーくーれーてー」

そんな中を三人の影が、寄り添いながら田んぼのあぜ道に伸びていた。

「お前、あいかわらず歌下手だなあ」

「ほっというてよ、ご機嫌なんだから」

「私はしおいちゃんの歌、好きだけどなあ」

「ほら！ わかる人にはわかるんだよ！」

「ハルも上手いとは一言も言っていないけどなー」

「そ、それは……」

「……ハルちゃん？」

「い、言っていない！ 私言っていない!! 下手なんていってないよーっ」

迫る夕闇。

山際に日が沈み、西の空が赤く燃えていく。

『今日の終わり』はやっぱり少し寂しくて……。

だけど、それでも相変わらずぎゃいぎゃいと、三人はかけまわったりじゃれあったりしながら、家路に就いていた。

「まあ、それはいいとして……やっば海、楽しいねー」

「楽しいことは否定しないけどさ……」

「うん……」

「……なに？」

おばーちゃんの店でかき水を頂いたあとは、結局海に行った。水遊びをして力一杯海水を掛け合って、その後は沖まで競争をした。

「しおいさ、裸で泳ぐのいい加減やめようぜ……」

「ばんつは穿いてたよ？」

「そういう話じゃなくて！」

「誰かに見られちゃったらどうするの？」

「誰も見ていなよ。人、あんまりいなし」

「そういう話でもないっ！」

水着を用意していた二人と裏腹に、しおいは服を脱ぎ捨て下着一枚で、ほとんど産まれたままの姿で泳ぐのが好きだった。

「しおいちゃんももう、子供じゃないんだから……」

「大丈夫大丈夫。おっぱいまだちっちゃいし」

「だからそういう話じゃないっ！」

「見てるこつちが恥ずかしくなっちゃうんだよお」

毎日の様にそうしているおかげで、彼女の肌は見事なほどに小麦色に日焼けしていた。

「オトシゴロだなあ、二人は」

「お前もなっ！」

「しおいちゃんももう少しオトシゴロになろうよお」

「んー、まあ、考えとく」

昔は、三人で本当に素っ裸で海遊びをしていた。男の子がいたって何にも気にしていなかった。それはしおいにとつてもいい思い出だったし、今だってそれでいいんじゃないかって、そう思っていた。

「考えとくじゃない！」

「私たちがいる間に、ちゃんと水着着るようになってね」

「えー、めんどくさいなあ」

めんどくさいというのは、本音の一つではある。だけど同時に、タテマエでもある。

変わりたくないのだ、しおいは。

変えたくないのだ、彼女は。

あの頃も今も、変わらずに、ずっと、ずっと、楽しく、幸せに……。

「バカだなあ、しおいは」

そんな彼女の思考を読み取ったかのように、ランは笑った。

「そんなことに拘らなくなつて、変わらないよ。大丈夫」

ハルも、くすくすと笑つた。

「可愛い水着、着ようよ。一緒に買い物に行こう？」

「だって、お店ないよ」

「ちよつと遠出すりゃいいじゃん。夏休みだぜ？ それくらいしなきゃ」

「そっか。うーん。そっかあ、そうだねえ」

何故だか不思議と、そんな考えにはならなかった。簡単に思いつきそうなものなのに、まるで気がつかなかった。

「でも、いいや」

そして、笑う。

「水着は学校があるし、それ、着るね」

くすくすと笑う。

「えー、お買い物行こうよー」

「隣町だろ？ そんなに遠くないじゃん」

「そうだけど……あたしはその分、二人ともつともつと遊びたいかな」

三人で行くお買い物はきつと楽しいだろう。水着を見たり服を見たり、甘いものを食べたり今流行だというタピオカミルクティを飲んだり、それは夏の思い出の一つになることだろう。

「だけど……」

「あたしは、それでいい。明日も海で遊ぼう！」

「なんだよそれ」

「まあ、しおいちゃんがそれでいいなら、私たちはいいんだけど」

「うん！」

それでよかった。

そう。

それでよかった。

それだけでよかった。

しおいはただ、彼女たちとの夏の時間を大切にしかつた。

「それじゃあ、明日も岸辺で待ち合わせ？」

「おばーちゃんのお店で良いんじゃないかな？」

「えー、またあそこかー」

「ランちゃんだって、お婆さんキライじゃないでしょ？」

「キライじゃないけどさあ」

「じゃあ、決定！」

代わり映えない毎日で充分だった。

それこそが、しおいが求めるものだった。

「ま、いいか」

「うん。いい、いい」

「強引なやつー」

「知ってるでしょ？」

「うん、知ってる」

くすくすと笑う。久しぶりに会ったはずなのに、ずっとずっと毎日側にいたかのように言葉に言葉を交わし、笑い合う。

「じゃあ、今日はこれでサヨナラだね」

「うん。サヨナラ」

「腹出して寝て風邪引くなよー」

「引かないよっ！」

気がつけば太陽は、すっかり山肌に沈み隠れていた。

真っ赤に染まった西の空だけが、その存在を証明していた。

カナカナカナカナ

聞こえるヒグラシの声。

カナカナカナカナ

もの悲しく、一日の終わりを知らせる声。

「ありがと、ハルちゃん、ランちゃん。また、明日」

しおいが二人に向かって大きく手を振ると、あぜ道に延びた大きな影法師も、ぶんぶんと手を振りサヨナラを告げていた。

§

海の底で、眠る夢をみた。

暗くて静かで、寂しい場所だった。

§

じーわじーわじーわじーわ

頭が痛くなってしまうほどの大音声が聞こえた。

じーわじーわじーわじーわ

だけどそれは不快ではなく、なんといいばいいのだろう。

『わたしはここにいるよ』という、魂の叫び。生命の煌めきのようにも思えた。

「ふー、あつっーい」

麦わら帽子を被り直し、額に浮かんだ汗を拭う。

「毎日毎日、すっごい日差しだねー」

ばたばたと手のひらをうちわの様に扇いでみせて、少しでも涼しい気分を味わおうとする。

「いや、それ。こっちのセリフ。暑すぎだろ、このド田舎」

「でも、私、この熱さ好きかも？」

「うげ、ハル、お前マゾかあ？」

「違うよー。だって、都会の熱さって、もっとムシムシしてねっとりして、思い感じじゃない」

「その代わり建物の中に入ったらクーラーガンガンじゃん」

「それはそうだけど……」

「せめてコンビニでもあれば涼みに行けるのに……」

「残念。そんな便利なものはありませーん」

「知ってるよ。てかなんで得意げなんだ」

それでも、うだるような暑さの中にあっても、少女たちは笑顔だった。熱さすら楽しんでるかのようには、汗だくになりながらも表情は輝いていた。

「それにさ、都会にはこんな場所、ないでしょ？」

その理由は、目の前に広がる光景にある。

「うん。すごいね」

それは一面に拡がっている、黄色と緑の洪水。

「こんなとこ、前、あつたっけ？」

地平線の果てまで拡がっているかのようなひまわり畑。

「村おこしらしいよ？」

そよぐ風にゆらゆらと揺れて、黄色と緑は海原の波のようにならねっていた。

「その割には観光客とか来てないんだな？」

「うーん、ひまわり畑だけじゃねえ」

ぎらぎらとした太陽に照らされきらきらと輝いて、空を向いて咲き誇っていた。

「でも、貸し切りみたいでなんだか嬉しいね」

「人類滅亡って感じだな」

「なにそれ、ランちゃん物騒」

「でも、そんな感じじゃないか？ なんかさ、わたしたち以外誰もいないみたいな……」

「ああ、それ、私も何となくわかるかも……」

広い広いひまわり畑の中、黄色と、緑と、青しかないその世界で、まるで人類はたった三人になってしまったみたいなの、そんな風を感じてしまうような光景だった。

それはなんだかとても悲しくて、とても切ない景色のようにも思えたけれど、同時に、なんだか不思議な、なんだかほっとするような、そんな感覚でもあった。

「ひとりじゃ、ないんだ」

「うん、ひとりじゃない」

ぼつりと呟いたしおいの言葉に、ハルはこくと頷く。

「だったら、それもアリかなあ」

そんなハルに、しおいはにっこりと微笑む。

「しおいはさみしがり屋だからなー。ひとりにしちゃうと泣いちゃうもんな」

「何それ。あたし、泣かないよ？」

「ホントかなあ」

「ほんとだって！ ねえ、ハルちゃん」

「ふふ、それはどうかなー」

「えー、ハルちゃんまでそんなこと言うのーっっ！」

「ただど実際のところ、本当に、本当にこの世界にひとりにされてしまったらどうだろう。」

悲しいだろうか？

寂しいだろうか？

泣いてしまうだろうか？

泣いてしまうかもしれない。情けなく、子供みたいにぼろ

ぼろと涙を零してしまうかもしれない。

悲しいのはいやだ。

寂しいのはいやだ。

ひとりはいやだ。

そんなの、いやだ……。

「……」

そんなことを考えてなんだか泣きそうになってしまつて、しおいは慌てて空を見上げた。

眩しい太陽に目を閉じて、額から伝ってくる汗を拭うフリをして、目元こっそりごしごしと擦った。

「……大丈夫だよ」

そんなしおいの手をギュッと握るハル。

「大丈夫だって」

もう一方の手を、ぎゅぎゅつと握るラン。

「私たち、いつだって一緒でしょ？」

「そうそう。一緒だって」

「……嘘ばかり」

心の奥を見透かされたような気がして恥ずかしくて、しおいは少し、拗ねたような声をあげた。

「夏休みが終わったら、二人は都会に帰っちゃうじゃない」

ふて腐れたようにくちびるを尖らせて、ふいっとそつぽを

向いた。

「大丈夫だよ」

「だけど、それでもハルはそう言つて、更に強くしおいの手を握る。」

「そうそう、大丈夫だって」

ランもにかつと笑つて手を握つたままふんふんと振つて、

ハルの言葉に続ける。

さあああああああああ

その時、強い風が吹いた。

一斉に背の高いひまわりがそよぎ、しおいに微笑みかけるかのように、咲き誇った花卉を見せた。

「だってさ、夏休みはまだまだこれからだぜ？」

「楽しいこと、いっぱいいっぱい出来るよ」

「うん……」

そうだ。

まだまだ夏は始まったばかりだ。

その後のことなんて、今考えることじゃない。

「そうだね」

だから、しおいも気を取り直して、二人ににっこりと笑顔
を向けて――

「なあ、このあとどうする？」

「私、喉渇いちゃったなあ」

「ああ、それじゃあ、おぼーちゃんのお店、いこつか？」

「へ？ あおぼーちゃんの店、まだ潰れてなかったのか？」

「あはは、ひどいよらんちゃん。お婆ちゃんに怒られるよ」

……あれ？

こんな話、前にもしなかったっけ――

§

海の底で、眠る夢をみた。

暗くて静かで、寂しい場所だった。

そこで、あたしはひとりだった。

§

にぎやかな、祭り囃子の音が聞こえた。

ざわざわと、人の喧噪が聞こえた。

「どこからこんなに人が来たんだらうねー」

その様子を見て、思わずしおいはくすくすと笑ってしまう。

すっかり日が落ちた夜、提灯の明かりに照らされた神社の
参道。

にこやかに、楽しげに道を行く人々は、皆思い思いに露店

を覗き、金魚掬いや射的に興じ、林檎飴やたこ焼き、焼きそ

ば、唐揚げなどといったB級グルメに舌鼓を打っていた。

「お、なんか美少女がいるぞー」

「こんばんは、しおいちゃん」

そこにやって来て、にこやかに声をかけるのはハルとラン。二人とも、艶やかな浴衣を身につけている。

「でしょ？ でしょ？ 可愛いでしょ？」

その二人の声を良くしたしおいは、浴衣の裾を持ち上げて、モデルのようにくるりと一回転して見せた。

「馬子にも衣装だなー」

「ランちゃんがそれを言いますか」

「ふふ。二人ともよく似合ってるよ」

「ハルちゃんも可愛い。それなあに？ 空の柄？」

「うん！ そう！ しおいちゃんは金魚さんだね」

「おーい、わたしの浴衣も見ろよー」

「見てる見てる。ランちゃんは、風と雲？」

「そう。びゅーって吹いてる風と飛行機雲。カッコイイだろ？」

ぼんやりとした提灯の明かりに照らされた二人の姿は、いつもとは少し違ってなんんだか儂げに見えた。少し目を離すと姿を消してしまいそうな、そんな危うさがあった。

「どした？ しおい？」

「ううん、なんでもない」

だけど、しおいはそんな心の中の不安を追い出して、にっこりと微笑む。

「じゃ、行こっか」

参道に立ち並ぶ夜店を指差して、きらきらと表情を輝かせ

る。

「おばーちゃんがね、露店の金券くれたんだ。だから、あたしたち今日は大富豪だよ」

「おばーちゃん？ おばーちゃんって誰のこと？」

「駄菓子屋のお婆さんだよ、ランちゃん」

「えーっ！ あおばーちゃんまだ生きてたのか!？」

「ひっどーい！ 言いつけちゃうよ」

「あ、まって、タンマ。怒られちゃう」

「うん、きつと怒られるね。宿題全部終わらせるまでスイカ

あげない、とか言われちゃう」

「ちょっ！ しおい！ ハル！ このことはご内密に……」

「どうしよっかなー」

「宿題見せてやるからさー」

「違う学校の宿題なんか見せて貰っても仕方ないもん」

きゃいきゃいととはしゃぎながら、道行く人波を縫うようにして駆けだした。

「んー、まずは焼きそば食べよう、焼きそば！」

「私、りんごあめ欲しいなあ」

「えー、わたしたちこ焼きがいい」

「あはは、あたしたち食べ物ばかりだね」

「ほんとだ」

「まずは腹ごしらえからだろ、基本基本」

三人各々望みの露店に、突っ走っていった。

「おにいさん。焼きそば大盛りくださいなつ」

「あの、私、りんごあめ。その青いのと、赤いの……あ、そのおっきいのも下さい」

「おっちゃーん。たご焼きちようだい！ おまけしてね!!」

そして、再び成果物を手にして集合。

「ハルちゃん、買ひすぎじゃない……?」

「だって、どれも美味しそうだったから……。それにしおいちゃんこそ大盛りっていうにしてもほどがあるよ」

「おにーさんが『ストツプ』っていうまで盛るよっていうから、どこまで大盛りになるのかなーって見てたら……」

「あはは、お前ら食い意地張りすぎだろ!」

「ランちゃんのはもうたご焼きって盛り方じゃないよつ!」

「たご山だよそれーつ!」

互いに互いの持つているものに驚きの声をあげて、それからけらと笑った。楽しくて楽しくてたまらないとばかりに、声を上げてお腹を抱えて笑った。夜になっても空気は少し熱くて、額やうなじに少し汗がにじみ出ていたけれど、そんなことを忘れてしまうほどに愉快だった。

「さーて、じゃあ、腹ごしらえも終わったし、次は射的でもするかあ」

「私はヨーヨー釣りしたい! ヨーヨー釣り」

「型抜きとかあるかなあ、あれ上手くいっただ例しがないから、今日こそは……」

「私、スマートボールっていうのもやったことないんだよね

ちよつとやってみたいかも」

「しおいは何がやりたい?」

「え……?」

二人が楽しげにあれこれと夜店の名前を挙げるのをみつめていたしおいは、突然声をかけられて少し困惑してしまった。

「んー。そうだなあ……」

それから、少し考えて、顎にツンつと立てた人差し指をあててうーんとと唸って……。

「金魚すくい」

ふと視線をうごかした先の露店の看板が目に入り、ぽつりと零した。

「金魚すくいやりたい!」

「お、いいね」

「うん、いいかも」

二人の賛同も得て、金魚すくいの露店に近づいていく。

「おにーさん。三人分、よろしく」

そして、おばーちゃんに貰った金券と引き換えに、何とも頼りなげなボーイを受け取った。

「さて、どいつを狙おうかな……」

「あの黒い子、おっきい」

「いやー、あれは大つきすぎるだろー。畏だよ、畏」
小さな水槽の中では、赤と黒の金魚が悠々と、気持ちよさ

そうに泳いでいた。透き通った水は露店のテントの上から吊された白熱灯に照らされキラキラと輝いていた。その輝きは金魚が泳ぐのに合わせて波紋を描き、なんだかとても、とても綺麗で幻想的で、少し切なかった。

「うん、こいつだ！ いくぞっつ！」

まず動いたのはラン。

ほどよい大きさの、あまり元気すぎない赤い金魚に目をつけ、そおっとポイを近づける。そして……。

「とあっ！ よしっ！」

タイミングはばっちり。上手く金魚をすくい上げた――

と思ったのだけど、

「あーっ！！」

あと少しのところで、無情にも破れてしまった。

「ちょっとおにいさーん。これ、薄すぎない？」

抗議しても、露店のお兄さんは『残念でした』と笑うだけ。

「よしっ！ じゃあ、私が……っつ！ あーっつっ！」

「いや、そんな風に水の中に入れたらダメだから」

そして、次に挑んだハルも、あっさりとポイを破ってしま
う。

「あとはしおいだけかー」

「がんばれ、しおいちゃん！」

「うんっ」

すいすいと気持ちよさそうに水の中を泳ぐ金魚を、じつと

見つめる。

その中でも一番元気がいい、ちよつと大きめの、一際赤が目立つ子に彼女は狙いをつけて。

「よしっ……！」

「おいおい、そいつは大物過ぎるって。無理だよ」

「さっきの黒い子よりも大きいね」

言われなくたってわかっていた。

この子はこの水槽の中で、一番狙ってはいけない子だということくらい、見ればわかった。

「だけど――」

何故だろう。

あたしは、この子を『すくわ』ないといいけない気がする

だから。

だからそう。

しおいは――

§

にぎやかな、祭り囃子の音が聞こえた。

ざわざわと、人の喧噪が聞こえた。

どこからこんな人がやって来たというのだろう。神社の参道には、後から後から人が溢れて来ていた。

「ふふ、やったね♪」

その人波に逆らいながら、しおいは軽快なステップを踏みつつ、にこにここと微笑む。

指から吊り下げた小さなビニール袋の中で悠然と泳ぐ赤い金魚を見つめて、満足げな声を漏らす。

「いやー、すくい上げるとは思わなかったなー」

「すごいよね、しおいちゃん」

「そういえばしおい、昔から金魚すくい上手かったよな」

「うんうん、子供のころ思い出した」

その少し後ろを歩きながら、しおいのはしゃぎっぷりにやっぱり笑みをこぼす二人。

「名前は どうするの？」

「んー、まだ考えてない」

「しおい二号でいいんじゃないかー」

「ランちゃんセンスなさ過ぎー」

「む、じゃあ、お前ならどうするんだよ」

「えー？ そうだなあ………しおに？」

「ぶはっ！」

「あはっ、あはははっ、しおいちゃん、ランちゃんのこと言えないよー」

「えー、そうかなあ」

けらけらと笑う二人に不満げな表情を浮かべながらも、しおいもくすくすと楽しげな笑みを漏らしていた。

「まあ、名前はゆっくり考えるよ」

「それがいいな」

「変な名前つけたら、かわいそうだもんねー」

「金魚鉢も買ってこなきゃ。おっきいやつ」

「綺麗な方がいいね」

「水草とかもいれてやってさ。ああ、明日はそれ、買いに行こっか？」

「この街にそんなお店ないよー」

「ホームセンターくらい、隣の町まで行けばあるじゃん」

神社から離れるにつれて、人影は少なくなっていく。辺りをぼんやりと照らしていた提灯の灯りもなくなり、祭り囃子も遠くなり、辺りは徐々に寂しくなっていく。

聞こえるのは蛙の鳴き声。細く、切ない虫の声。そして……三人が歩く、土の音。

しばらくの間三人は、無言で金魚の様子を眺めながら、自

然の声と、遠くから微かに聞こえる祭り囃子に耳を傾けていた。

「星、綺麗だね」

そして、ふと、一言呟く。

「うん、ホント、こっちは星が綺麗だよな。都会だと殆ど見えないからなあ」

「満天の星空って、こういうのを言うんだね」

「ほんと、綺麗だな」

前に読んだちよつと難しい、おしゃれな感じの小説では、

『星降る夜』なんて表現をしていた。

感想を求められたけど本当に難しくってなんて言えばいいかわからなくて、『星が綺麗なところはいいよね』なんて、ズレた事を言ってしまった。

あれは――

誰に聞かれたのだったか？

「そういえば読書感想文の本、読んだか？ わたしまだなんだけど」

「私は読んだよ。でも、感想文は苦手なんだよね」

「わたしは本読むの自体が苦手なだけど」

「ふふ、知ってる」

「ハル？ それともラン？
いや、違った気がする。」

「しおいはどうなのさ？」

「え？ あたしは……」

そう。あれは――

「夏も、終わりだね」

何故だか、急にそんな言葉口がついて出た。

「夏祭りが終わっちゃったら、もう、少しだ」

突然寂しさが心の奥底からわき起こってしまっただけ、もしかしたら少し泣きそうな声になっていたかも知れない。

「しおい」

「しおいちゃん……」

そんな彼女を心配そうに見つめる二人。

「あは、ごめんね。何言ってるんだらうね。ええっと、読書感想文だっけ？ あたしはね……」

「大丈夫だよ」

きゅっと手を握られた。

「そうそう、大丈夫」

「ぼんぼんって、肩を叩かれた。」

「私たち、ずっと一緒だよ」

微笑むハル。

「変なこと心配すんなよ」

微笑むラン。

「だけど……」

「だけど——」

「だつて……」

「だつて——」

夏休みが終わったら、二人は——

§

一緒に、おばーちゃんのお店でスイカを食べた。

「やー、おばーちゃんの店のスイカは美味しいなー」

「はんつ、褒めたつて何にも出ないよ」

あの店まだ潰れてなかったんだ？ とか言っておきながら、

おばーちゃんの元気そうな姿を見たランちゃんは嬉しそうだった。

§

一緒に、みんなでテントを張ってキャンプをした。

「キャンプなんて、子供の時以来だね」

虫とか苦手そうなハルだけど、意外にも三人の中で一番楽しんでた。

§

一緒に、みんなで釣りをした。

「よっしゃーっ！ 大物きたーっっ！」

釣りをするのなんて随分久しぶりだと言いながら、ランは大物釣りを連発していた。

§

童心に戻って、ザリガニ釣りをした。

「うわあ、すごい。こんなにいっぱいいる。ちょっと気持ち

悪いね……」

そんなことを言いながらも、ハルは随分とはしゃいでいた。

§

大声を上げて手を繋いで、肩を組んで抱き合って、たくさん、たくさん思い出を作って。

駆け回った。

はしゃいだ。

夜の公園で花火をした。

「綺麗だなあ……」

「うん、すごく綺麗……」

大きな花火大会で見る打ち上げ花火には敵うわけもなかったけれど、手持ち花火も、小型の打ち上げ花火も、べの線香花火も、全部全部、三人で笑顔になるには充分な物だった。

§

§

海の底で、眠る夢をみた。

暗くて静かで、寂しい場所だった。

そこで、私はひとりだった。

コーン コーン コーン

聞こえるのはただ、ソナーの音。

夏休みにやることは全部やった。

思いつくことはみんな、みんな楽しんだ。

笑った。

コーン コーン コーン

やけに悲しく響く探信音。

コーン コーン コーン

だけど、それはあたしを見つけてはくれない。

ここにいるよと言ってみても、認知してくれない。

なんだか、おかしい感じだった。

潜水艦としては『見つかつてはいけない』はずなのに、『見

つけて欲しい』だなんて、矛盾していると思った。

コーン コーン コーン

聞こえる。

コーン コーン コーン

聞こえる。

これはあたしを探しているの？

それともあたしが幻聴を聞いているだけなの？

わからない。

わからないけれど、ただ、ただ、あたしにはその音が聞こえて――

暗くて静かで、寂しい場所だった。

海の底で、眠る夢をみた。

§

さあああああああああああつ

その時、強い風が吹いた。

「あっ！」

その風に被っていた麦わら帽子が飛ばされて、一面のひまわり畑の中に吸い込まれていった。

「なにやってんだよしおい。ドジだなあ」

その様子を見て、くすくすと笑うラン。

「私、取ってきてあげるね」

慌てて、駆け出そうとするハル。

じーわじーわじーわじーわ

頭が痛くなってしまふほどの大音声。

じーわじーわじーわじーわ

命の全てをこの瞬間に燃やし尽くそうというかのような、
魂の叫び。

「待って」

「え……？」

真夏の焼けつくような日差しを全身で浴びながら、しおいは小さく呟いた。

「どした？ しおい」

「気分でも悪い？」

「そうじゃなくて」

そして、しおいはゆっくりと空を、大陽を見上げて。

「もう、いいよ。二人とも」

「いや、海に落ちたわけじゃないんだからさ」

「そうそう、探せばすぐ見つかるよ」

「ふふ、わかってるくせに」

刹那。

音が消えた。

蝉時雨も、風の音も、微かに聞こえた波の音も、すべて、すべて聞こえなくなった。

「もう、いいんだ。ハルちゃん、ランちゃん。ううん、違う」

沈黙があった。

長い長い、沈黙があった。

ランの表情は強ばっていた。ハルは、ひどく寂しそうな顔をしていた。

「ありがとう。晴嵐さん」

ばんっ

何かが弾けた。

びしびしびしっ

何かに、ヒビが入って砕け散った。

そして……。

気がつけば、辺りは一面の青。

ぼんやりと、ゆらゆらと揺れる青。

水底の青。

「本当は、わかってたんだ」

しおいは笑った。

「本当はあたし、わかってたんだ」

とても悲しそうで、だけどどこか満足した、やりきったような、それは不思議な笑顔だった。

「あたしは、沈んじやった。あたしは、もう、鎮守府には帰れない。二人は……あたしに、夢を見せてくれていたんだよね」

そう。

それは夢だった。

体験したこともない、きつとこれからも体験しない、けど彼女がどこかで望んでいた夢。

やさしい、やさしい嘘。

「しおい。わたしは……」

ランは言った。

「しおいちゃん、私たちは……」

ハルは言った。

——いつまでも、いつまでも、あなたと——

友達だった。

大切なともだちだった。

あの日は共に逝けなかったからこそ、今度こそは最後まで一緒にいるのだと、しおいだってそう心に決めていた。

だけど……。

「だめだよ」

ゆっくりと首を横に振った。

「それは、やっぱりだめだよ」

悲しげに、けどどはつきりとした意思を込めて、しおいは言った。

「あたしはもう、帰れないから。あたしはもう、ここから動けないから。だから、伝えてあたしのこと。あたしはここにいたって、みんなに伝えて」

それが、あたしの願い。

長い長い夏の、終わらない夏の、さいごのいちにちに願うこと——

「ありがとう。ほんとうにありがとう。あたしと友達でいてくれて、ずっとずっと、一緒にいてくれてありがとう。だから——」

飛べ、飛べ、晴嵐さん。

青い空へと飛んでいけ。

あたしの思いを乗せて、あたしの願いを乗せて、ずっとず
つとどこまでも——

晴嵐さんともだちだから——
離れ離れになっても、ずっと、ずっと、一緒だよ。

見上げれば水面のフィルターを通して見える、どこまでも
澄み切った青い空。

その蒼穹を、一筋の飛行機雲が彩って……。

ぼつり、ぼつりと。

ふたしづくの雨の結晶が水面に落ちて、波紋を作り、そし
て——

——消えた。

§

海の底で、眠る夢をみた。

暗くて静かで、寂しい場所だった。

そこで、あたしはひとりだった。

だけど、不思議と——

さみしくは、なかった。